

石川県・中能登町 地域日本語教室の人材 の活躍とコーディネー ターの役割

2019年9月7日（土）

文化庁日本語教育大会（東京会場）

（公財）石川県国際交流協会専任講師
文化庁 スタートアッププログラム アドバイザー
今井武

日本語教室立ち上げについての中能登町の強み

1. 町からの手厚いサポート

2. コーディネーター3人の特性と役割分担

3. 熱心な教室参加者

1. 町からの手厚いサポート

①町、教育委員会生涯学習課の全面的な支援

②立地のよい教室提供

町中心部の生涯学習センター内。図書館、ホール、研修室、調理室。ショッピングセンター、道の駅等と近接。

③教室の設備も充実

洋室、和室2部屋の日本語教室専用の部屋。教材保存場所、ホワイトボード、プロジェクターあり。WiFi整備予定。

→人が集いやすい教室になっている



2. コーディネーター3人の特性と役割分担

- コーディネーター1：福永さん（町職員）
情熱を持って教室の立ち上げ・運営に関わる。町、サポーター、文化庁、アドバイザーの中心で交通整理。
- コーディネーター2：（元・町議会議員、元・町職員）
町内外に広いネットワーク。組織作り、その運営に長け、会議の司会、PPT作成、報告書作成・送付を一人でこなす。
- コーディネーター3：（日本語教育経験者）
隣市で長く日本語教育。授業の話題選択、活動の流れ、資料作成を中心に行う。

→役割分担が明確で、それぞれの力・特性を活かした

3. 熱心な教室参加者

- 日本語サポーター
 - ・つながりが密で、打合せやSNSでの連絡を頻繁に行い、打合せ参加などもいとわない。
 - ・外国人住民も3名、運営に加わり、積極的に発言、活動。
- 外国人参加者
毎回10名以上の参加者。町祭やイベントにも参加し、外国人住民の存在を町民にアピール。

→参加者が積極的で、町内に「人が集う場」ができつつある

開室当初からの課題

- どんな人にどんな目的でどのように日本語授業を行うかの議論が不十分。
- 教室運営の役割を各サポーターに割り振ったが、連携が不十分。
- 授業が、住民相互の交流より、情報提供が中心になる傾向。
- 他教室のプリントや資料の形式だけをなぞって使用。

5月に日本語教育経験のある「コーディネーター3」が交代



経験の浅いサポーターだけで、授業をどう組み立てるかなど、上記の課題を解決していかなければならない。

中能登町サポーターの「外国人住民を支援したい、役に立ちたい」という気持ち

【地域日本語教育コーディネーター】に求められる資質・能力

- 技能（1）「地域日本語教育の体制整備に向けて、現状把握・課題設定をし、課題解決のための取組を計画的に実施することができる」
- 技能（3）「日本語教育プログラムの策定・実施・点検・改善を管理することができる」 「日本語教育人材の要請・研修の在り方について（報告）」

中能登町で今、必要とされている地域日本語教育コーディネーターとしての役割：

- 外国人参加者の期待やニーズを、サポーター間の議論を通して、想定する
- 想定に合った話題を選ぶ
- 話題を展開する教室活動やその手順を考える
- 手順、活動の内容をサポーターにうまく伝える

具体的に「中能登町の日本語教室で外国人住民にどのような活動や情報を提供するか」につなげる

今後に向けて

- 地域日本語教育スタートアッププログラム3年目であり、体制を立て直したり、サポーターが教室活動を組み立てるノウハウを学ぶ時間は限られている。
- 2020年度からは文化庁事業から離れるが、県国際交流協会がサポートし、能登地方でのモデル教室として成長して行ってほしい。